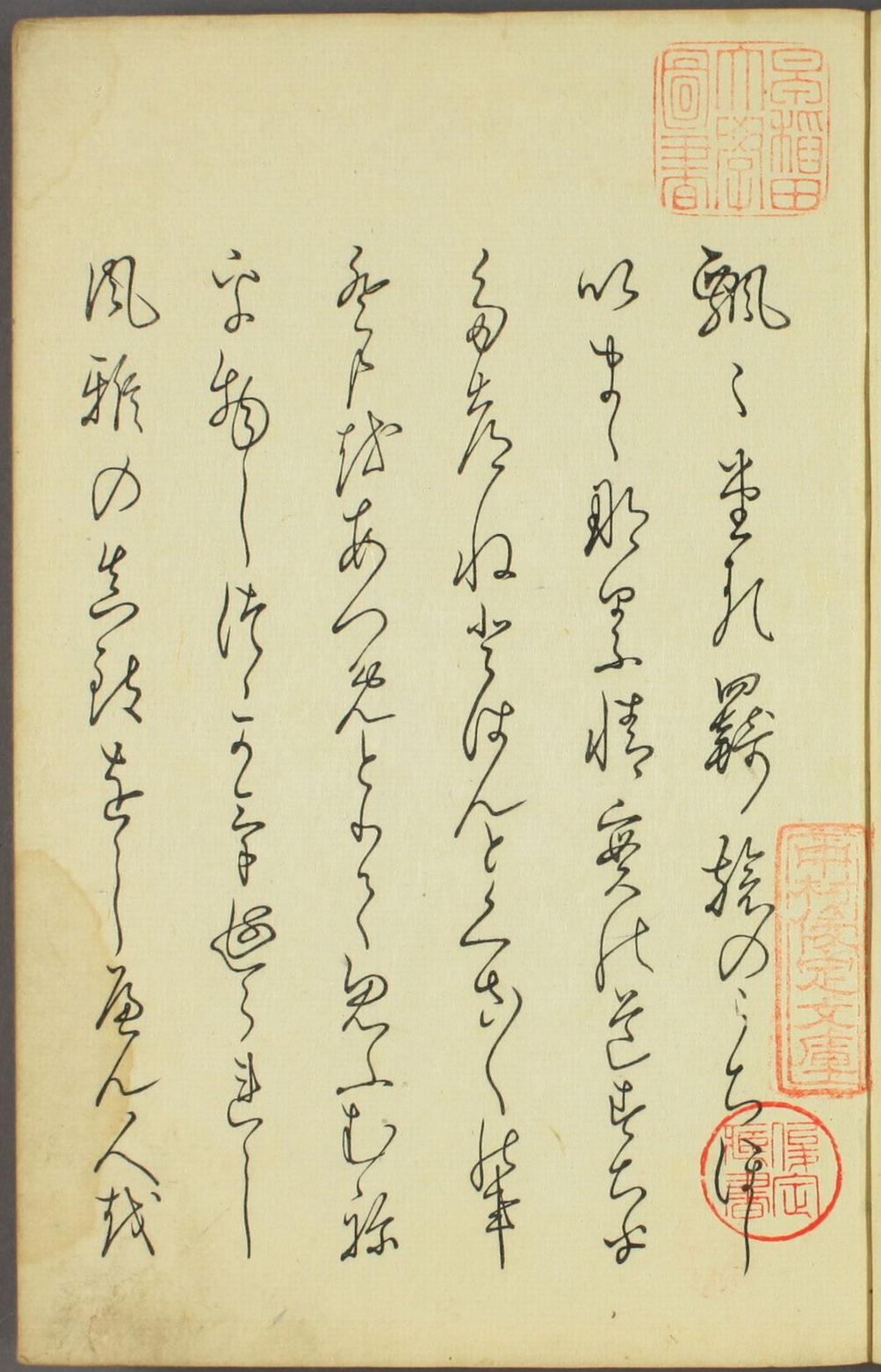
蕉風無格辨

全　蕉風談の巻
　　拾遺の巻

月

中村俊定文庫
文庫 18
908
1

宗教法人
靖国神社
宝物殿
靖国神社
宝物殿
靖国神社
宝物殿
靖国神社
宝物殿



安田良齋

まことのみ
ゆめまぼろしの世
蘇室主人

枯野の一

蘇室久安述

晋子のかしら尾花の序ふ

旅ふ病〳〵夢も枯野をかけ廻る

また枯野堅牢なるもせぜわ中

され〳〵ぶこれさへ妄執なぐ〳〵風雅の上ふ死ん

身の道を切ふ切ふ悔まれ〳〵八日の

夜乃吟也 元元 十二日の申ふ刻だらふふ成

元禄七年十月十二日なり

芭蕉翁文集之中俳諧教示の詞

予の風雅を夏爐冬扇のごとく衆人に用る所なり徒に釋阿西行の詞のみかゝ初めいひちらされ侘たる色なれやこゝろ知ほゝ

後鳥羽上皇のかゝせたまひしもこゝらなるべしまことあるもの歌を詠ずるやうなるまことあるもの侍るやされば此みちはをもゝ其ほゝを一生ごとに

あがぬ程うゝなるべし好古人のあゆ我もまた先古人をめたる所をもあよゝ南山大師の筆は道にも見えたり風雅も

またこれにおなじ紫門の外にいひく灯をともしびく

芭蕉談下巻

わが俳諧を前句の心を知ゝ務べき我はかち一句のうへ物に感合し物の情をはぐゝ知てはひたゝ俳ゝあれ

此三章の味ひ俳諧地の風情こゝに至り
一正風傳ゝいまゝ事を切りゝ小晋子が枯尾花
の序ハ漫もこのねたれ身を所詮小似なる
うれゝ風の吟行小狂ゝ徳化ゝ正風の
師ゝ仰き仕るなりやあれど門人より正風
ゝ唱ふれとも有なる此傳翁の書給
ひしものゝ桃青書やあれど壮枝より
正風傳ゝ申されゝよろゝ此で小枝
またゝのなをもくられ此ハ壮枝

傳ゝ申されゝ我まことなるべし此
ゝ翁傳を書なまさるもあゝど野
風傳ゝ名付られゝ脳落なるべし
予ハ俳諧を蔓燼冬扇のごゝあるを
見て志れ屋きなる
一傳中小翁の俳諧ハ萬葉の意なりとある
翁ハ釋阿西行の道より入るゝあるを
萬葉の意ゝ申されゝ甚誤なり其風雅乃
ゝ此免ハ人ゝ申されゝるなる

一傳中に江上の一路あそぶやいつとあり
其ゝを向上なるべき歟江上とこゝろ〳〵に音通
の誤りなるべし又真如の月を觀じ心裏
に花をも尋ぬべゝやあり是い皆禪家の
見性の事ゆく達磨大師も九年の面壁を
なしたまへく甚はたらきとゝ結跏よ
風雅と四時の風景に其身を養ふものゝ
あれぞ翁未期の病中までも枯淡のさま
浅ましゝ坐禪入定やとゝ心乃

たゞ爲ん
ある人曰文艸法師の青山白雲やゝ中さ
也い事い悟道なるべゝ答ふ言語の俳
諧にあらざるの俳諧なるやゝいと奏より此
青山白雲の変いく来たりされば俳諧
付肌の一句なりへりの感合なる所理
を形色言語絶なるべゝ禪家の問答て
あらば此青山白雲と正秀への三十棒也
そゝを浅談を見く味ひなまふべゝ

此正風傳て書元来北枝の書ける
ものなるべし此ほかなる見れば
人孔見ゆまじく侍る

かれの二

芭蕉翁文集

許六ゟ離別の辞

木曾路を経て舊里に帰れる人を森川氏許六
ゟいと古へよりの風雅ゟ情ある人なる後ゟ
笠をうけ草鞋ゟ足袋いとゞ破笠ゟ霜露を
いとゝ已ちかをせをく物の實を志れる後
ゟ流れをの今仕官ほやけの為ゟ長剣を腰
ゟ乗掛のうしろゟ錦をもたせ歩行若

黨の惡き羽織の如く拔て風ひるがへ
多くの有さま俗吠人の本意あるべきこと
椎の花たゝらみも沙と木葉の旅
うゑ人は旅あるもなく木葉は蠅
正風傳ふ上雲上より下土民までもかゞる
べきことなり唐明の豪傑あり取ること
なしあるけあく北枝のわるくて
のゞらわるものなり異形

芭蕉談

曲翠問發句を取あつ給ふ集作ありやいかゞ
道の執心なれば爲やあ曰是いかゝさんと
我上手なりとやいはんや我を忘れたる名聞
よりは出ず幸なり集ありて其風躰の句を撰
ひ我躰やいつこに我ありまで形を我俳諸
撰集のこゝろなしなるべし負德以來其
人々の風躰あるべく宗因まゞ俳諸を形色
來まりたれども我云所の俳諸と其俳諸と
異なるべしとなり荷兮野水み後見しく

冬の日春秋日あるべし等あり越人飄集あるべし殷
句も数百ありぬべしもあるべし
句集にて出版せし句集なきゆゑに巻末にて
句集にて出版せし去来元北の笈みに應じて
今の一変正風なるべしいたるまでも置てる
ふ我句ふかく満足しぬ猿蓑集ふかくさに
侍らべく満足なり　東武に久しく居をしたる地なる
書きひとなり
ばかりて孤屋野坡の志ありたりにもあらず
旨ふまでも序も素龍ふゆづりなれば無下に落

ばかりの炭俵集ふかくる今度土芳半残の生國の伊賀に
撰なるべきにみちのくに行ぶやきに故後猿蓑に
せんや撰ひうるに侍らべく彼地にて集出版なき
巻なるべしあるべしくに巻なるべんにいるべし
ゆふ叶ひ侍らむ美濃の落梧の瓜畠集なるべんを
思ひ立ばれば甚志とげべしに身まうるあり
集ふ贈らんと思ひ侍らたる巻あるに狀度曲翠亭
の巻あり彼是四五巻出べしと半残土芳まで
申置侍れば發句二百余もあるべし春の日

ほどの小冊なれども、いつも集に其風躰を撰む
ものなれば合體なる歌よりして
萬葉集をはじめ廿一代集の時に世の氣稟
まことなる風躰也夫故古今新古今[redacted]その
代々の風躰をあらそひ妙頂めく御撰びなる
に其風躰のはなはだまちまちなるべたり
やうく集をもて云べうしかれども歌のことはづまた
いつ事なりしか俳諧やてもの同徹あれべきなる
真宝の玉海集の如き玉石のかけのまぎれなる

米糠のまぎれなる有雜無雜のあらめ書や
人の句〻ばらひ集めあたまでやて我こゝむ一躰
極らぬ何を以く風躰やせむたるを我も集作をり
やく名聞の雅なるを妙類あまたあれべゆめく
真宝を誂謗をなるあるべく人のうへを以教をく
二三子に示良なるを問ものたるべ撰者是非分明
ぞ〻是成よう〻夫をあ〻きやいつべうんや翁
曰其人のあけ分にもなれ〻一位の句をよりやはも
へるもあるむ夫をよう〻やはへる句のようなれば

うゝぶよりうゝぬやまにおもかよりにほひ上品乃
句をんなにやうゝぬゆゑみようゝぬや搭べ津く
浦々遠境波濤の限り黄ひあ佐ぬく句ゝ我
やうなるゝへたりとゝいて集と云べくみや我
家の俳諧乃一躰の姿ゆゝく我ゆゑ應ぜぶる
句を一句ものをぶ曠野集に貞室宗因等の句
をのせるにおよぶ我家の俳諧の躰なれば那を
なぐかゝきい俳諧れ俚言なるゆゑ一文盲
愚昧の者をやくにあるべく自己ゆ俳諧をもたら

やうなる者の多く出来侍らむ報俗の今日あれば
何ゝをもべくむかくいなぐやゝ他乃人をこの後
しむるあらぶ我家の俳諧をかゝん為也
完賢口をゝつゝ一事なるれや慈ふかゝるふ
正風傳ゆ句我四海ゆ発るゝ辰べゝと毎下ゆ
いゝわゝやゝいなく異なゝ
一貴書ゝゝ絶ぶゝゝき事やゝゝ義をゆき
不申候翁の病床ゆ給仕ゝ侍る時間家の集を
見るべきゝゝ冬春あゝ野様ゝのもれべきゆ俳諧の

たゞ詠みなれ給ふ歌書をいぶせうよろ
こうべし　や菊の曰何ぬるも冥し　かるべ
我家の俳諧を求め得ざる所なもむかるを
さらぬあるべし口まねせんやなるべし
其故を古への歌人乃哥書筆手本にして歌詠
なる人なし　其時代〻の風を考へ其風を我
もちゐして歌よみたるよ思へり　夫故
一家をなすべきを古人のあやまをまねして哥よみ
なる人をいつまでも風馬牛生涯我歌よみる

人なし　中ごろ我家の俳諧をまねぶ
なるはべかりしも狂歌ばかりを初心より上達
まで哥書又は物語等をいぶせの書なるも
見渡して家の風を失ひ尤句数を好む

以上

十月八日

舎羅謹書

野坡物語

句数を好むべし
云云然れども其
前は初心なる
上達まで歌書
又は物語等を
ろくしとの心
て見るべし書を
読て心ゆかむ
きを得て句数
なりたるなん
まろくしくなる
句数を好む人
きをめて狂を生
きべし源氏雨夜
の物語を書も
人の頃てなる
なるべきなれの
教へある如く俳
正風傳は初心のうちは句数をこれみ夫より
姿情をわたり大山を越むるの業へをなる

諸と相撲取る
いとゝ見苦しく侍る

處を案じ侍べし云云又昔の時代こゝを
考へべきいと筋の状文章よりたぐれく
ゆかりを出しものゆゑ物がたりばかり
まことにしらしなどよく味ひ見るべし

こゝ注解の三

正風傳曰心高く姿邪路に入安く心ひくく姿
古人の胸中に見えたるあるべし
ちぎりたるも法なくいと人の書ふるまひ甚さ
みづから夫を先いとん心高きにつく条
勝心あるべ邪路に入べ有べし勝心云
まことん氣の我慢心の事あるまことん氣の我
慢よりて人ゆゑ上を恥ぬ無知に終るゆゑ婦女
児童ばかりなる百人一首をとりたるやうにあるこ

まことに翁のまことひ給ふ釋阿入道西行法師の
道をや千載集に俊成卿の撰みを一所なる則自
判の加茂社歌合に沙弥釋阿や書ひ給へる
新古今集に西行上人の歌専らなる集なるべ
しれるの集に皆其頃の風体備なるべし感深
註に八代集抄季吟法印の著書に翁の師
なる宗因なれば俳諧にもよるべきある註釋あり
山家集に西行上人の歌集なる其角もしれを
得て翁の骨髄に入れるあらんとれば世の

宗因達者なるもんだをあれば尽うべし　此間雅詞
俳詞の差別よく考へべし又ひくなるやうに
条に欲心あるべき古人の胸中を志れる事あるを
ばあるべ無欲なるべ故に静なる歌に
あるべ心まことに古人の胸中をうべる事あ
なるべなる傳中に向上一路にあるべ
心裏の花を尋孫真如の月を観ずべとい
文艸法師の青山白雲やいつ幸皆欲をうる法
方便なる欲心捨なるうへにはゆる真如乃

月心裏の花青山白雲向上の一路やいつ[illegible]
たり〜禅みまゝ[illegible]の色備欲[illegible]て別
捨るかゝつものたり〜不義なくむさぼらは
ふこゝ形り是ほどの事ゝ
神國のあるゝはゝ[illegible]ひせげる信人
婦女子みゝゝ皆よくゝ志[illegible]事なれど[illegible]西
まだいまゝ人ゝ深く[illegible]得でゆゝあるべき
翁これを慎み給ひ〜ゆゝ来朝まで[illegible]枯野の夢
みんな風雅ゝうはゝ〜生涯山野を樂〜み

ぞたゝゝ是我學ふ[illegible]れを慕べ〜

芭蕉談

戀句の所み翁曰

古六歌の句数定らず敷後二句以上五句となる事一句みゝ捨る云云祖師気魄の大なること此童を以て知なり

連歌の上をかくいふゝ恐あれ似あれもそれ
連歌の事ゝ俳諧の上みあるねを背き奉れ
みもあるべ然ゝも我古人の罪人なる事をま
ぬれどゝ後學の作〜ようらんゝを思
侍るのゝ云云

同書み

格は中世の中昔は千載集新古今の頃とか俳諧はひとへに連歌を
輕めて去きらひとせしかども安くたやすくあり残こるなどへて
格あるもたやすからいとくゝ誤なるべし

うゑくゝやいろをみをなるもゝ紅葉
市膳ゞよりのぞみまたるぜのふゝ

この外一段やすく翁の俳諧を見るに是まこゝろ
ふかの掉なきごとくゝ飛鳥のあゝたる紀如くに
蕉門ならあらずとなる所なる何ぞ格のいやゝ
我用ひんや是蕉門の蕉門やすなる所なれば能々
味ひてさらに紀事にくゝ言語のおよぶこゝろ
ふかあらばなるべし

傳ふ格の出入をいふものちいみじきひがごと
といふべし

是蕉門の無格は翁在世の時やすでに太來凡兆ばかり
ざる處獨丈草是を得たる故翁遷化の後又これをいふ
人なくれば蕉門の無格は是蕉室が宗旨也其詞曰蕉風
無格調詞和平
蕉風無格なれば春の句は秋の句附るこゝもはきめれど
よくゝ無格は只作の志ばかり為なり調詞の和平な
らん事を要やすし

蕉風無格調詞和平附意の全躰に意無きうち物を
感激せず默々として悟入せし民化の一助なるべし

かるみの四

ある日禪僧来りて予ごとかれ野を見ていて
笑ふべし〳〵愚僧も俳諧をこのみ〳〵こゝあるを
翁の真面目を禪にたとへこれ尾花の序なる開禪
の法師をあふれたまひしことあきらこの形容
向上一路心裏の花真如の月青山白雲等の意なるべき
もなく如くいひなし〳〵只山水の樂〳〵みをもねゝ書
きたるに大なるたゝひあるべし〳〵予ものいふくもつ
き禪道を我ものとなしかるみを問ゞ〳〵それ

佛法の末期の一念大切なるよし兼好ねもうしけり
其末期のいのり夢いうれ野をかけまはるやうにて
みてる大涅槃に入やいふものなるべきや僧がいく
是ゆたてるうたばるてやや笑ふたれども此久しき
やうに月翁を禪心やや紀来ゑび其所ら何とかく
あれども徳をうしなまびくようんまして西行
釋阿い佛心なれるものを釋阿西行の道や書く禪
心なきうち心をたまうらびぬ待るべ予いそく其こと
是ゆ似く甚非なる釋阿西行の歌ふまふふある

風雅のかもむき不なうべしなやへぬ萬葉を慕ふ
人い業業の古への法まをうなび古今をかもふ人ハ
紀氏のあやぬ我をてふうふやいくぞみれおなぐやう
みかりあれなわうちを志ばるあるを近き俳諧ゆも
猿うのを好むものゆ法るみの炭俵をこのむもれ炭
俵の調なるをみれ風雅のおりもむき不あれぞこ色成
いうれをかり僧曰いばゆ色ゆもせやや佛心ある人を佛
心なれやゆいうれく本音といひうゆ予云
紫門の辞ゆ君子ゆ多能を恥やいうれ

あれど翁のみを僧にもとめられまゐらせたる風
雅なれば山水旅泊の樂しみなるべし幸こそ
とぶ三體詩の序に以吾朱文公之學而較之則
又有向上工夫而文公詩未易可窺測者也とい
朱文公禪を學びもし故にこの向上の字あり
文公いま度禪を學ぶ人いへども聖人の境なる人故
に聖人の學者や翁もいま度禪を學ひもしや
いへども風雅の本心なれば故に風雅心やゆゑに山水
旅泊の風雅や云に非るまや僧然とやいはの

これ聖の五

いま日俳諧師来たりていふこうれのを見侍り
て禪心風雅心の問答に先ぶることもなへや
俳諧宗匠みな千載新古今山家集等ばかりて
叶ぶるやうにいとふ甚非なる今翁の道出来
て侍ぶそ何ぞ他の宗旨の歌の道をうばふ我
翁の俳諧のうへにかくこそかたるねばきものを作り
和歌の道を横領ぶるにはあらんなれば一事
いとく甚なる論もなくはいはるれ事をいはるの

こゝ和さを歌よむを連歌ゝぐ連歌より俳諧ゝぐ
甚源を尋ぬるこゝろ菊面前ゆゑも門人なを問ふ
詞あり既ふいなる如く俳諧の心得ふあるべき歌
書ゝいぶをを見るべゝ
しこゝろへられ侍る予いこゝろに菊のこゝひ
給ふ釋阿西行をいなを夫なを氣力ふまこゝろせく
萬葉古今をも見ふべゝさなられど菊の口ふ
衆俗ゝようゝ風躰ゝなるべゝ俳師又ゝく
やゝなる御家の御俳諧あをさゆゑ上雲上や

かゝゝ北枝の詞尤なれを何ゆゑふ菊い上雲上や
書なをまゝまゝゝいゝゝふゝ手ゝく
やゝふゝなき御あをの事ゝ志ゝなゝ
菊のみゆゑ心ゝゝゝゝゝゝゝ
まゝなを御方ふこゝる野風を
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝの仕官ふゝゝ出ゝゝ又面目の如ゝ
ふゝこゝふゝなゝ

後水尾上皇松永貞徳ゝ連歌ふ工ゝなるを聞ゝゝ

十三朝紀聞
後光明天皇永
應二年癸巳九
月之条曰
松永貞徳号字
長頭丸彈正久
秀之姪善和歌
受古今於幽齋
藤孝又工連歌
初立花開祠隱
其側後應兆然
親王之徴後方
廣南池田里数
息堂芦丸屋設
吟花廊于堂屋
之間堂内安子
昂真蹟法華経
置上宮太子善
提達広人丸賈

其俳歌を奉らしめ給ひ賞しかたまひ俳諧
花の本名称号を賜ふ蕉翁乃
俳諧ハ隱者の幽情閑雅の風致をもねがせられ
なれどかりぐ〜き法式をもとなしたりとは
やごとなき御方のこれを称するもあれ
かるもおぼし給ひて花のもとにいたる美称
をもあまはをたるもあるべしあるこゝろ死されど翁の
本旨を思へばいかゝ貞徳師ふるまひたる
称号ゆゑそこの里村氏世々ゆゑ来たるやう

之定家紫式部
画像自号柿園
法皇嘗得其諧
歌大奇之賜以
称曰俳諧花本
感激創斯道軌
則為一書名御
筆故世推為諧
歌始祖云遺書
有戴恩記等

翁がむかし隱逸の野風をしたひ萬葉集のうたの
かたゐの此むかしの尾ゆ椎まろがさいはひ
陰ゆ生むかもいまをたるこゝろ幻住庵の記の奥
ゆ先なのむ椎の木もあるを其木立ゆ見えきべれば
蕉門ゆ椎ごゆゆをしもたまたるなんゆいと
似たりたるこゝろ本意なるまゝ
椎ごゆもゆ捨ゆをたもはをぞうれ野の夢
見られまゆ俳師ゆのいそび

元治元年晩春

芭蕉談ハ書記ハ焼捨いと書て後ハ香の姿ハ青柳の一章を簡記ち書〜又の書翰ハ俳諧示教の書あり云云終ハ心定まらざる所明らかに見えたり師ハ後愚人の敬をうること人後世とても多うるべし

蕉門附句の上格なき支句響移位面影

正風傳 此書ハ師蒼乱蘭更宗匠より授玉ひしを寫し侍りし袖珍抄の正風傳ハ此書を翁の口決なりて流布せるもの多く書落なる所多〜

一格ハ入〜格を出ざる時ハ世ばなれ格ハ合ばる時ハ邪路ハ〜る格〜入格を出〜始て自在を得るべし

一詩歌文章を味ひ心を江上の一路ハ遊ひ作を四海ハめぐらす道べし

無門関 乾峯一路 頌曰

未舉歩時先已到未動舌時先説了

直饒著著在機先更須知有向上竅

附肌の優ハ句を要とせ此ハ一千歳不易一時流行

此ハ一つの句ハ皆句ハ句なるべ〜の表徳〜是を用ひ句を作らんと思ふ心の念着なきを〜ふ風雅心より句を生〜理ハ〜る所なり

江上之江字蓋以江向音通誤歟

一他門の句を彩色の如く芭蕉流の句ハ墨画のごとく折ハふれ彩色なるハ〜もあらべし

他門ハ〜はなり〜ひ志を〜我事一ツ成

一名人を地をよく〜の〜〜ハ城をふれ

あゆき不ハ妙あり上手を強き所ハ形も

〜ろみ所を

一古人の跡をふまべ古人のもとめ給ふ所ハ

千歳不易の時ふるゆゑに一時の流行なりと文艸つゝ但し文草法師い翁よりも人品のあらはる所ゆゑなり文草法師い翁も文草法師い久しく我門に遊ぶ人なれば〜しかれども支あるべし

を求むべし

一等類作例吟味すべし

一古書撰集に眼をはらべし

一その世俳翁の風流を學ぶ輩い先鶴のあゆみの百韻より冬の日あゝ野深川ひさご猿蓑の炭俵翁の文熟覧すべし句い時代々々を考ふべし

一初句のうちの句數をこのむべし夫より姿情をわろ大山を越向ふの嶺へおもはる所を案ずべし六尺を越んものをまれに七尺をのぞむ

翁の句々を見侍るに俳詞い勿論雅詞も詩文の熟字も字音も万葉詞も何をきらはず云ふなくこれ用ひ来り何ぞ俗談平語をたゞ俗談平語より知らんやこれ俗談平語より知らぬもの書入なり

尺をすぐべし高きを邪路に入安くこゝろ低きを古人の胸中にはいる事あるべし

一俳諧い中より以下のものもなほ誤れるい俗談平語のみにあらずえたるものなり我の翁い俗談平語をたゞ云えるのみにあらず世俗の事いつを俳諧やゝもすれば上雲上用ひ来り何ぞ俗談平語をたゞのみにあらず下土民までもたゞきき道なり唐明の豪傑なりやこれ俗談平語より知らぬもの書入なり

一蕉翁の次安い青柳の小雨ふるれなるべくく折々微風も恥る事なり只心のいゝきを恥べし

あやなきなかめをもとめ附方いらせ月の夜ゆうれのゝ
こゑかすかゝゆほ風るゞ如く竹村をゆでゝ琴聲を
きくがごとゝ情心裏の花をも尋ね真如の月をも
観ぜべゝ口を飛流のあもちふだるゞ如くあるべし
歌てゝふをは専要なると我國にてゝふを第一なる國
なり則やうんけるこそけ故先哲の作を味ひ一字もそまたなる事なき
きたて結ひく詞の玉緒ふ悉しわ匂ハ切字なり鶯やあうや淋しくて何もうその如
此奥芭蕉翁のわ匂あれゞ人も出れるものなれ
ざられを畧きあ
元禄七年春　北枝

けるり得ん意のされるり物い皆切字ふく四十七字俱ふ切字なるへし一字の置様ふこゝゆきき戦

しるしたる有こ雅詞の上ふ附言明らかなるへ
ゝ黒谷の一枚中むゝ以来風雅をなの〜む人々の佛ち道をも
起請文の餐をよみく　ちやせれこゝい今の世乃喫茶の如くなるゞ〜或ハ
はき捨しあと　ふ吹迄木の葉大志ある人のこゝろはゝ拔やけ〜こゝれふかくる
ふ吹ゝこゝをを　伴信友翁ものもたゝ多ゝうるとぬゞ〜西行上人ゝ〜廿三ゆく
かゝるこゝはき

この正風傳をはゝふ記ゝぬるゝ者れるゝ年ゝ
人ゝ者ゝむなれゞ者ゝぬ人のゝ多ゝの
ゝゞ困みふゝ嘆ゝふん　蘇室

古跡へといひしを今と直さましゝを其字のみ引立られたり真淵翁頭自らの詠哥を座右に書つけて一ヶ月程も諷詠せられしとそ聞侍りぬ翁も羇旅中此事ありしも多し名人のかくよく思ひ感ずなきものぞ

出家ましぬ其誠意のいたる時なくて空しく風雅にをはりぬるにそ故に法をみれ佛道のみちもあらし元政法師のごときそ一流の法則もあまくまくに佛法にいる人やといふへきを我の翁は法りぬ却りてよしもあらへたゝ山水花鳥に對して幽情をのへられたれ此みちの名人なるへし佛心の往々なりし樂天の詩乃如くそれなら中むかしの風雅の法まさやいかむ其徳をいたはんとまく正風傳なきも法をもなしく禪心を真面目のことく唱へ

たるを却てこゝろをせまくもやといふへし士朗は漢學醫業にありても佛の事おほくのへられたるあるは風雅に業をまほとやまさむしもし禪心を真面目やなれはあらんは蒼虬梅室卓池の宗匠あらはれ以下みな衆門に縄をはり風雅のくまみやいふへし いかにそや 嗚呼枯野の夢後世の佛法にくらふれは名利をはなれたる事高しやいはん 皇國の風雅の枝葉やいふとも外邦のおよひ所にあらす法れをまするへし心ありのか

ゆ〳〵山水幽静の地ふあそびく飄々たるもけ多んそ真卒の味やいそむ歟

蘇室再記

枯野集かきそへ〳〵芭蕉翁を祭る辞

俳祖桃青翁の御霊ふ申〳〵侍る

古池や蛙とびこむ水の音

断除嗜欲想永徹天機障身居萬物中心在萬物上

志ぐ〳〵ら花のうへなる月夜哉

天下元無事勞々我有心相携沙上詣山月二更深

文草法師秀逸うゑ〳〵やいろをみをなる村紅葉

の附句中〳〵言詞よのへうなき御膳がよしを松うぜのふ〳〵　文草

言外の意所謂坐忘ゆり芭蕉談ふ翁の詞〳〵

幻迹有去來達観無古今長嘯人不聞山風吹蘿襟

申尽し難しと
有點〻〻あるへきの場なり

枯枝に烏のとまりたる秋の暮

芭蕉談に
世間を以て俳諧
に遊ぶ物と風雅
を以て俳諧に遊
ぶ物とあるなり
俳無心所着に
遊び給へと有り
無心所着は道心
にして元政上人
歌の如く文章師
の俳諧は如来第
一義の場にて
よしなしと云時
俗禅多く殊に
まぎれ安し風

人不能外事事不能外理二障佛所名吾儒寧有此

蛙とびこむ水の音

苟能深積累豈患無高譽如何世中人甘心鐵爐歩

沙を這ふいぞくの中に墓の聲

ものを人のつひ出をそなく

稽首觀音宴坐寶石忽々夢中應我空寂觀音不來

我亦不往水在盤中月在天上

もろもろのこころ柳にまかせべし

雅心に花鳥に
こころを労し
る所有心なり

君若問鳶魚鳶魚體本虚我拈言外意六籍也無書

初しぐれ猪もしらぬ小みち

俗心に
所なくべし世
間と以て俳諧に
遊ぶものは是
俗心雑心なり
風雅心なる以
下は語るべし

窓外竹青々窓間人独坐究竟竹與人元来無兩個

名月や見もせぬもひとりの身　太来

行年三十許已ト入山期處々開花逕牀々是酒巵

わる事やくどくどしの水ぐき　丈草

是ものもひとり一歳十匹衣一日兩盃飯真樂苟不存衣食爲心患

先ものもひとり也翁是
ものもとるやうに
たるゆく狂者の
の意なりと云事

大きさや蛙の出くせ舞ふ小ぼろ月　仝

盆花浮紅篆烟繚青無問無咎如意自横點瑟既希

のようにこそ
〳〵一代の秀才〳〵
狂者とも詠淫
の典のこと也

昭琴不鼓此間有曲可歌可舞

まつぶらしゝ二日の月は吹ちれる
こがゝしの地も落さぬ時もれ
の句詩を作や自然とこの甲乙
妻とゞ雑のうちたゞくを身を細くしたるこの
風姿の高きを山家集の意
馬ゝ寂〳〵幾夢月遠〳〵茶の煙ハ牡牧こ詩の熟字
這出ゝ〳〵庵火炉ゞ志てこの墓の多い萬葉集の詞
腫物〳〵はらる柳のもとひしひ邪い体勢物語小藤の

志ゝひ三尺六寸ぞうの出ぬべく此外七部の句々
炭俵ゝいもゝ〳〵雅詞を數ゝ多くかゝまと
の古ふゝ地面影ゝ作ゝ〳〵博識多
聞情い當世ゝ通〳〵知ゝ給ぬ所なきゝ
君入門の人ゝ〳〵曰
我ゝ似ぬ〳〵真乗瓜
はゞ後世俗談平話をたゞのみや觸流〳〵俳諧
地も俗々〳〵なゝ君こ誤こ後の世ゝあやまり成こ
君生涯羇旅ゝ杜甫詩集山家集観音経をいれ〳〵

心地の經の無我觀達〻情を山家集や杜五郎を
胸中にたゝる笈中の遺物ゝ丈草太來のよろこび
いくばくぞ〻則情實ひとしかるべきいふべきを
北枝てふの已ゞ閒記よりも出る所をちぎるゝゝ書
ゝ正風傳をいふるよりの以來實我ゝもふりのを
悟道見性ゝ佛家の如く情をおもふ
もたゝ實我忘れ枝葉ゝ經の無やなる
ものを實なる詩歌ハ情なるゝ情實ひとしか
ゝ人世閒を樂しむの教をあらはるゝ

君ゞ誤りたる後生のあやまりを
金籠鎖鸚鵡山木縱班鳩巧拙知誰是天機不自由
君幻住庵のたゝみを
小雨閉空齋青々竹映堦道人終日靜一枕到無懷
此意旨あるたゝやく續扶桑隱逸傳ゝ入
たゞ〻何〻隱逸ハ唯佛家のゝみあらず市中ゝ有
名を隱ゝ我隱逸ゝ〻ゝ〻ゝ後世稱良ひ
やゝ其情實を行ひたるやゝ天然の人品のみ是君ゞ
誤りの後の世ゝあやまりを君ゞ須ゝ深川の菴淋〻

水流縦急境常静花落雖頻意自閑

此意旨あらまく樂しみながら教示あられば花々鋪

深川の時の如くおもひ君のあらぬまことのれ

繁華の場所を好める是なる君が誤なるか後世の

あやまりの

君五十年禁戒のなん閉関の説を自書〳〵

蓬やひらく後おもふ門の垣

やあらぬも風雅の為め禁戒早くうしなふ

枯野の夢ふ只山水の真致を娯樂むられ蕉門の

俳諧なるべきやう言葉もなき風雅心の禅

心ち唯ふ藾室ぞ俳心ろうれを御霊の御前ふ質ス

元治元年十月十二日

藾室久安謹書

風雅心

推こうもかさねて心れんぴやうく
こう様躰の変を常に見る所〳〵
千載集の序ふ曰久〳〵此道を学ひ深く其心を
はこれる輩いはゆるあさなさて中ふ松ぢ扉ふの
色音の様ふ感ぜられる物是を樵へるあさなさを
いふ如し

附意

見れいまして笑ゆるもはなひやく〳〵わを

原そぬ時のおてろをはなり
蕉門の附意をはこれを呂此心萬物一体
なりの理を得るのをはこれを作を立名はこのむ
事是私已のいまを忘れるを故なり〳〵

詩歌をよむ心得

こまく〳〵詩とは句を姿をおもを形色を
はひかく〳〵わるのをはこれるあの
閑寂を文字のうへ〳〵尋めるを拙〳〵風雅心

則閑寂

序

蕉翁以英傑之姿隱於俳句者也其吐
性靈片言隻語吟者莫不悅服爲可
謂奇矣翁云非蘇新黄奇不可爲矣
其有自得之効可見已夫詩者本於性
情而已机固有定格也意境融徹出音
聲之外者是爲詩之妙詩妙謂之天籟
〻〻天調也俳句亦何異焉哉今集其天

諧而奇新者使翁在焉則亦宜不嘩藁

此編邪

慶應元年十月　支峰閑人　趙覆

しのぶのさとよりあいてきたるむ
つうなりけるを越中なる利縣左
の翁のもとにあるをとりておもれ
ばんよりこのうと新屋の翁のむの結やち
まとなりいるふみもてきて初つれ
さるよりあるものになりたるいと
ひのをあるをうつるあるひや
おりるをとりけるの俳諧をもてあそ

れるをせばのおるよりの越中なる利れ
ちのをつるをひのをあるをむ
つうまをいるひをおるをるの俳諧を
はめれるをおるをにいまそのをを
まるつるひの格ふいるをむつういる
をいるをるをいるをいうおもひつる
せば家をのをはあるをよりの蕉風
の俳諧をもてあそ

ろをかゝるのみみよふるまゝみやひ
れおのつゝなるにわひていとおもし
ろうおもえゝかなをわのれまふゝぬみ
ちのふみあつらおもかましといやこゝか
いはんかぬ

寛政元年八月　源信章しるす

蕉風無格

蘇室久安撰

翁の俳諧ハ今人の俳諧ハ更にかはる所なし
かはれる所ハ無格ハ奇新とあり今人ハ格有て
奇新なし翁ハ格なくて奇新あれのみ無格ハ
少しくもくもれ奇新ハいつくしくなき道なり
もや鳴呼奇新ハ心悟ハ思ふへし
俳諧ハ可忘不可為註師ハおはしますてこそ
あるなり初心ハ則名人なれと初心のこゝろを

いかも忘れ尽くす故に翁曰俳諧は門前の
婆々に問へ〳〵や則禅語にてよく知識成
忘れて〳〵俗に落れ事なき真言なり
園に竹のたつみたる枝ふしなるもあるみて
うき有高きあり ひくきあれまたまたなるも
芭蕉庵の翁の風雅に〳〵無格なれ格あり
格有〳〵無格なる格の無格を悟る得格を
格を自然の格にして更に太嫌ひなるの煩らそ
きいなき事なる尽くその隠逸幽情の巻々を

れなる中にうそうそ多く成四巻え
らみ出〳〵無格をあるそれ是まを
やむ事を得さる所なり

有聲之更。無聲之句忘知識。
忘見解。忘分別。忘順送。無轍
之境。無格之妙。今所撰此集。
獨坐小室。默然悟入。可以養
出静中端倪者也。

炭俵の巻也
其巻の序ふ
有聲ハ絵を
あやとる云云
則蕉翁の巻
みれ有聲の
絵をあやと
故なり風雅ふ
心培存する
人ふあらん
有色の絵を
うたる事あ
たらず

うたん事ふのたやすき山路哉　芭蕉
やとりとふ雑子の啼たる　野坡
家普請をたのもしく過ル雨ふり　仝
うみ松たにあるに米の通　蕉
青のうちはせ一月ハ雲　仝
義誠をあきたる湖水き　坡
作頭へ業もはつ迷惑ハ　仝
娘をうたん人ハ行ぬ　蕉
春長閑ひとり碁の盤　坡

月無格

春秋奉続

さくらいの花ハ過ぬ二月　蕉
歌をうたふ人ハ中ふ向ふ春　坡
ひとふいこむ出ハ袋ハ年　蕉
よもぎ尾の持病を押ふる　坡
さんみやはけ強る月　蕉
初雁ハ二月の寒ハ残る　坡
寒ハ残ハ居合ひとあき　蕉
田ハ尾の法ハ雨ハ雨ハ　坡
ひとふ押ふ壬生の念仏　蕉

月無格

以下春部花を加へく

蕉風の俳諧に雲のつまづく秋の月　蕉

たゞ居ながら後ろ姿ふ　坡

江戸の名所もものうるおぼろ　蕉

さらふもいなかの月をうれ　坡

京に十夜ばらのこゝぬの夢　蕉

桐の木たゝ月はもの　坡

門先に家ふる雨の　蕉

ひろふ手に表こうの　坡

さ俳句ふ女房の親ふ根無草　蕉

無格まちく

まゝ　秋涼ぬ法人　坡

法師の法を松ふ新米を　蕉

縄ふを松ふ青麦の出来　坡

さ花家ふ寺の方ふ宮をあり　仝

魚ふ吟ふおくさまは新ふ　蕉

ふるる帰ひろふ物ふ宮ふ　坡

未進の高はさぬ美用　蕉

蓮へふ法師婦を連て来て　坡

屏風の絵ふ山みる茶ふ　蕉

花咲の恋
情無格

[illegible]

[illegible]の水[illegible]新清川　芭蕉

上張を[illegible]　利牛

[illegible]の[illegible]　岱水

[illegible]　蕉

[illegible]の[illegible]　屋

[illegible]の[illegible]　水

[illegible]の[illegible]　牛

[illegible]　屋

堺の附句
無意の妙味
妙句に準じて
外の妙をみる
是奇也新也
古今集[illegible]
[illegible]巻の山
[illegible]遠[illegible]
吹[illegible]

花の香[illegible]
理[illegible]歌
[illegible]
早[illegible]
[illegible]
見[illegible]
紅葉
御膳[illegible]
[illegible]風の吹
[illegible]
[illegible]型を發
情を得る奇
新の寄[illegible]
[illegible]

[illegible]都の[illegible]　蕉

[illegible]　牛

[illegible]　水

[illegible]　蕉

[illegible]汁[illegible]　屋

[illegible]　水

[illegible]　牛

[illegible]　屋

月花の坐轉
無格の絶妙

[illegible]　蕉

こゝろの奇新より
なる無格を不知
たゞ月花の坐輿と
心得られ格をの
がる事あらず

ふる庵に清水の中に住居たる　牛

去法も坊主総上人隔つゝ　水

泣事のひそかに出来し浅ぢふに　蕉

前句の絶妙に
對は忘の字妙
可感

置わすれたるかねを尋ぬる　屋

着のまゝにすくんで寐れば汗をかき　水

客を送りて提る燭臺　牛

雪の跡吹はがし
たると云又雪の
厚さと代ふ太
嫌の按排なし
塀の秋ゝさに
風細にも同じ

今のまに雪の厚さを指てみる　屋

年貢すんだとほめられにけり　蕉

息才に祖父の白髪の目出度さ　牛

此巻と〳〵所とつ
くに四巻さとき人
は一を以ても其蕉
翁の意旨貫く
されとも疑ひ多き
人は金蘭集にて
こゝに合せ見て
天格の巻と共に
同しからぬを知
つて而して心の奇
新よりなる無格
を悟るべし

堪忍ならぬ七夕の照　水

名月のまに合せたき芋畠　蕉

すた〳〵いふて荷ふ落鮎　屋

此ころは宿の通りもうすらぎて　水

山の根際の鐘氷る也　牛

横雲に秋ふく風の吹出て　屋

鰯のうへに雲雀ほえ侍る　蕉

参りにや女子はつかの連立て　牛

余所料なしに菫たんぽゝ　水

伊賀の山中長野峠に芭蕉翁初しれの古跡あれ

猿蓑の序に

我翁行脚の頃伊賀神戸の山中
めぐりたる小みの笠着て俳諧の神
を入たまひ名を桃青と改たまふ断腸の思ひ
叫びたまふ云云

猿に小蓑を着せて一事まことに猿に小蓑と
きせたるに初時雨猿も小みのを得
て山の月の情さへのこるに微々たる
しひ叫びたまふ事あるをもかなしみ
給ふ情の歎類了通ずれば禅家に以心傳心
といふこと不言にして応感する事也
とは蕉風無格俳諧の宗旨不言の応感
を以て第一義とする也

猿蓑集

市中は物うるこゑも夏の月　凡兆
あたらしき門たてさせ月見　芭蕉

其三句の無格
古人季の自然なる可感

二番鶏やうるさがられて寒の内　太祇
戻らうたんぬ一枚　兆

五句目の雑
無格

扶桑の銀ぬき見ぬ月の出　蕉
たゝかひの長き稲妻　来
鶏むせぶ城こそ秋の夕なれ　兆

可見奇新の
妙味
花のくりあみ
く無格

蕉の葉の形作ゆる気　蕉
道心のおこりは是や今年竹　来

絶妙の句なり屋の外を行くき　兆

魚の骨さらさらとまれる夜寒かな　蕉

まれ人いるまゝ小門の錠　来

立ちつゞく屏風を倒す女子たち　兆

満殿ちらす弁の美子後しまの　蕉

面影は寒を吹おとす夕嵐　来

消やゝ消ぬゝ寄てこうるる　兆

猿蓑のさゝやき聞る秋の月　蕉

ゝゝふ一斗樽よたゝる也　来

苗香の句は絶品蕉風のまゝなる也

月を花の坐ふ置無格

五六束生たる稲の穂

兆

笠袋ゝ踏みよる人の通

蕉

追ひ〳〵軍記語る夜持

来

てらちらつる蛍ふ水に乱

兆

戸障子もれ出ることの変居蛙

蕉

天井まで見つゝいつる蛍

来

ゝゝゝ仲秋を飛る月ぞさ

兆

雲霧ふ消ひて新しき月

蕉

ゝゝゝ月ぞ清たる掛屋

来

月の句作猿蓑の猿と世をうらやましつゝ草鞋ふ月ゝ句情芽の赤ふ有故ふ初秋を付し也句ハ詞格ゝ情ハ以ゝ作ゝ秋二句の無格

悪無常を風雅の情實也歡樂極つて哀情生ぜんとす自然のことばなり一校起請のひらがなは日本紀のごとちねを人々稱ちうごと

[illegible]　兆
草庵に[illegible]　蕉
[illegible]　来
[illegible]　兆
[illegible]　蕉
[illegible]　来
[illegible]　兆
[illegible]　蕉
[illegible]　来

同巻
炭俵は有色の画をいひ猿簑は無色の色をいふ詞對ちがひ意尤同じ

反汁椀の[illegible]やみなきのあり反　元兆
あ[illegible]　芭蕉
新[illegible]　野水
[illegible]　太来
[illegible]　蕉
[illegible]　兆
[illegible]　来
[illegible]　水
[illegible]　兆

此頭書ハ古今せきの無究妙絶あるもの此四巻のうち一巻ハ二三ヶ所程つ有つゝえらみ出〻〻深く其味ひとゝ〻ゑ実ハ手の舞足のふみ所を忘るゝ〻詞を以て作る事ハ〻〻心を以て作る人ハ言下なるべし

怪のくちゐをあつめて気味とす　蕉
長月なかばひとゝせ過ぬ　水
逢坂をこゆるの姫ゑ　来
重ねて秋中の人ゑ　蕉
あたゝ風ゑ吹ぬ月　北
四角の秋ゑ交る所　来
何をゑ見ぬ秋ゑ　水
夢やゝ古ゑ西ゑの夜ゑ　北
木ゑ花ゑ邪ゑ　蕉

ゑ　水
紫ゑ部の袂をゑ　来
ゑ　蕉
猿の鳥ゑ　北
ゑ　来
何ゑ　水
月ゑ　北
人ゑ　蕉
ゑ　水

月坐無搭

詞搭を立ハ小理ハ可入外道ハ詞の調ハ〻

れ精の通ひをもつて[illegible]
ふ堤より田のさと[illegible]
見るとなく詞の
意自らこもる也
一心格とは表に静ふ
夫より動ふ格の
如し美ふ花まつと
いとはあく青鷺と
是其季出る心
格なり此句蕉
の天地一沙鷗と云
詩句ふ出る名句也
一世四美殊ふ美美を
いとゝ記得し〳〵
心ふ有へ又眼中
の砂金

又も大事は能をやとも出る
来

[illegible]より田のまもやあていはきよも
蕉

かゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
兆

[illegible]
来

面白[illegible]の[illegible]
水

[illegible]
兆

[illegible]
蕉

[illegible]
水

[illegible]
来

十

蕉風の俳諧三十六句ふ[illegible]ひ自然の妙要と
樂しむのみ翁曰十一句め自ら花ふ[illegible]る
[illegible]又曰花ふ定座なし[illegible]ふ詞ふ[illegible]
無格の自然を聞え侍る[illegible]ふ死格[illegible]
[illegible]ふ無格を元[illegible]
[illegible]連歌の格未定[illegible]
[illegible]其定まる格なき連
歌ふ格を付たる格なれを格をたのつ
ふ[illegible]

去来抄に白翁古式を用ひ
なつめの時に
廃一給ふ
とハ論なく無
格なる事と知
るべし

あるハ格にあるハ芭蕉風の自然を
うしなふ故に無格といふ名を付
たるまでに其句の付こそ俳諧の
いとまなきを心得付かたを得む後を無格
の詞も病なれ捨べし神祇
釋教戀無常地名を表に禁忌とい
ふまでもなき事なれども表に
出る事句の付こそのたまひに出るなり
まれ〳〵なるを格を付たる人禁忌

神祇釋教戀
無常地名表に出たる例
金蘭集にあ
るなれども
なまれて夫をなるよ
ひんもなく
なるべき事也
侍れハ畧ス

なれ〳〵なるべし初心の名人なる
心を樂むを蕉風の本意といふべし

慶應元年五月

許曰痴人の夢をやぶる也

又曰蘇室利害の心盡ける故ようの如き
事を書く

又曰鶴のあゆみの百韻に五十韻ハ翁の
註あるべきに俳諧不可為註やいかれ
非也

又曰猿簑炭俵を俗の樂しみ也と近時の
諸名家みな云ふ蘇室ひとり蕉翁の
知識をもとれる所やすく高くいつを
避也
又曰蘇室の枯野集は翁を風雅心とつく
すつゝめを道心を以やすく非也
又曰風流のうへふうを如きみちゝ敷
すつゝ蘇室風流をもとゝ故也
又曰奇新を論せば無格を論をもとゝ

墮落は無格を論せば奇新を論をもとゝ
空蕩を奇新を無格の未發無格を奇新の
已發也奇新を即無格無格を即奇新ゆゑ
ふたつあるにあらず
又曰蘇室曰ひとり蕉翁の俳諧ゝろの奇新
をもとゝ無格をもとゝいまだ蕉翁を尊信
の故也但し世間おのれの爲の俳諧をやゝ
もすれば蘇室もおのれの爲ゆゑの無格や
ゆゑ有ゝ蕉翁を尊信せざるの故也

蘋室

常の業あるものれの為ふ俳諧をとき
く又何ゝせんや俳家又さくろの奇新よ
りあるべき無格をやうく何を以て蕉翁を
尊信ぞやなり尤然也尤然也
又曰金蘭集の天格巻たやふ同しこゝぬを
こゝろの奇新よりたるの無格れのたこゝふ
聯歌ふあるぬるのたり後世蕉風ふ定むるの
格へ尤痴論といつるく蕉風の俳諧たるこゝろの
奇新のみ今蘇室ろ論ぞる所實ふ蕉翁乃

愁眉をとゝやゝいつるたるこゝ

言詮不忘難以認泊船之夢
道心不了何能聽蕉窻之雨

跋

坡老云吾文如行雲流水。行於所行不得不行。止於所止不得不止。蓋篇篇之於佛偈。想亦當爾。雲容水態。自然成趣。豈有定格哉。後人設格自縛者過矣。讀此編。則可以知解脫之方而得水雲之妙矣。

乙丑桂秋

漢學學人暉書於
蕉竹堂

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一

一

蕉風談

蘇室久安述

一當今唱ふる所の蕉風俳諧ハ格太嫌等ハ全く後人の臆念より出るやうなれども古人の定れる俗家ハ流弊ハ蕉翁如斯格式定めたまひ事跡はっきりあるさる也

一蕉風ハ格をもちふる事數年の流弊なりけるを一時無格を聞こゝろあるこゝろ知らく先出ずして無格なるもいたる上品なる所なり

そ我志ゝ情を詩とする所

一　うたゝの校訂もなり

去來ゝ歳且の脇なり蕉翁曰去來ゝの誤て歳且の脇をかく作るやまたみきゝきれ脱ゝ侍るなりとひとゝ

みゆみのうへゝ神へこゝなる格了

いたゝきなる所を見る事うたゝ無格の空心よりゝ出るを辨ずる

一　蕉風ゝ和歌ゝ連歌ゝ和歌ゝ

詩ゝ和歌ゝ連歌の附肌ゝ蕉風ゝ附肌とゝ和歌ゝ連歌ゝ理ゝ巻へ物了巻ゝ蕉風ゝ理ゝ巻へ巻ゝ物ゝ巻へ唯空々寂々たるゝ句を吐ゝ自然の合感をまた詩歌ゝ物の理を忘れゝ自然躰を得る位上品ゝ蕉風ゝ詩歌ゝ和歌ゝ所なる所ゝ事物の理をとゝ以て上品の自然ゝ所なるゝ儒佛ゝ和歌ゝ

白沙先生の詩ゝ

人不能外事々不能外理二障佛所
名吾儒寧有此

一附肌のあらまし

うしろくやいろ波みをるむらみち
海晴のよひとまはうをのふく
是ときまやふ空々寂々ようを句をはきて
いはくこの理物ふうをたをこころ形
情塵の岸をとをたを河ぬね
祝ひりはさえうをかるふをうゆ

うをたをまくおかをはをふ理物の
はをあるあ
中の字はるふ丁やをあるを
生朝はひちくをたを墓ふの形
やをまくゆくやうをたを精

太來曰

生朝のをちくをあてはるうを
やいををよくを墓にの形やいくを字の形
祝係ふ治定くく附過るゆをふ跡の附句も

物のたゝずまひいやしくなる時
こゝ[illegible]無轍の境にいれみちゝき
もゝれて蕉風たゝれたり

一蕉風の全躰をいふ

歌たゝうたゝもたゝふ[illegible]たゝ[illegible]
事たゝの蕉風の俳諧文墨をたゝてゝたゝく
いひのたゝあゝたゝ反古たゝれたり
蕉翁の教ゝたゝうたゝ事ゝ[illegible]
〳〵隱逸道心の樂〳〵みたゝれた人を感動

さたゝ[illegible]もあゝたゝたゝその詞さゝふてゝ
をはたゝやたゝんふゝたゝたゝやゝ
たゝたゝたゝるたゝ俳詞雅詞俗詞まゝ枕詞
やたんもたゝふゝたゝたゝたゝ[illegible]
あたゝ詩文章の熟字も萬葉の詞もたゝ
たゝうやたゝうもたゝたゝたゝ出たゝまゝふゝる
まゝてたゝたゝ

日の本たゝたゝいたゝく

たゝたゝもたゝ通ゝ古人の詞をたゝたゝ
調詞和平ゝいたゝ[illegible]たゝその詞何

[illegible]習ふて[illegible]
[illegible]蕉風の風いづくにか来りて天格
[illegible]
[illegible]句の上ばかりにて
[illegible]理をもつて筭をもつて
[illegible]
故ふ隠逸道心のたぐひ[illegible]
又禁忌私格太嫌[illegible]
[illegible]私知按排をもつて待出[illegible]

是をいたづらごとなる物とて予いとれを
蕉風無格を申伝なるを空々寂々を養
ふ工夫なるべし

一

名聞をもとめぬをもとめ
いつもこころにかけるをもとめ

此うたを俳家の作なるやこれ歌人の
作なるべし[illegible]萬葉躰の歌を聞ぬ
[illegible]我らの耳ふる物遠くて異邦人のこと

なるべく其通辭をたのまれて
も聞得ぬ我俳諧も古人をみれども
離れてもみぬ其角嵐雪太來の今
のいたるまでいたくまでも其詞よくもの
侍るぬ今い江戸人の句も京人のわるぬも
あり京人の句も江戸人のよるぬもあるも
るべしとは其ひがみをせぬ其片
言通辭なくしてわるべかりしなれ
べしはるべく琉球人のうたもわるこの耳ふ

も聞えてゆのうし

一ある人曰この野集み椎うのかをもたま
をもの似たるもうらまうまかく
あるも其椎ものもたまをいとふよること
ひたすらこの谷〻曰
わたらしの岩みのをはの淺くても
老のなみをうけもたるうし
ば老も老の波たるうけもたるうし
いるをあるもの御なをしを賜を

まく法のにめ法を役人をは分にあらすんは
してその命に應ずるも不敬なりされ
ことにさきもはいふ隱逸道心の行ひあり
すや

一幽玄躰を問ふに答て曰和歌に十躰といふ
事あり幽玄躰長高躰有心躰纐躰事可然
躰面白躰濃躰見様躰有一節躰鬼拉躰
なるにあれよしみれうたよみたる跡より
法けたる名にしてもあとより幽玄躰をとく

まんやてよみしも法にあらすんは附肌とても
匂ひ附うつり附くらひ附おもかけ附ひゞき
附なといふもみな空々寂々のあとより附る
名にして此度ひゞきに附む匂ひに附んにて
いひて附るも法にあらす法るこそなし　其以前
ら附形十七躰も有しかとなりの今まてその形迄
蕉翁つゝ法事をのゆつて減し盡してたゝ
物も理もなくして空々寂々たるのみ誠に船
の棹なき如く飛ともものあはれなき如く神

代のひさしきを大海原おらんそうく風の
如くなる所にて是ぞ蕉風とぞいつべきなれば
翁のかの句をみれば幽玄躰と名付け侍らんもを
あてもよろしうそのうちみもよろ
しく幽玄躰をそなへたるも
元禄十四年四月廿日の日うせ給へる翁
をなくまつる九日の野ぶ郎
まもやく七日の一日をまつ
うたの事ありけるのちなりける山路

ふるいけやかはづとびこむみずの音
時の花をもとむる野中なれば歌の乱
こゝろ時なれば花をもとめ
たをもとめたるこゝろなれば
山路まで行やゆゝしき堂塔
ほゝきぶ大仏殿をもるる月哉
うたをもとめたる俳こゝろをこゝ
時のこゝろをこゝろみるべきなり
夕ぐれのみちをもとめるひとゝ

静かなる岩にしみいる蝉の声
又月やゆめの世の長ふ秋長
いなせまや宮仕方の安住の夢
七夕や秋を待たるはつめたき
所をしみく大根うり　秋の雲
あつ〳〵ゆゑ法華なる秋風
人形経をいふことあり秋
我長を[illegible]ふ[illegible]
[illegible]人を居[illegible]あきたる雲

[illegible]のゝ[illegible]ふ[illegible]ゆく牧のゝ[illegible]
野[illegible]ふ[illegible]ふ面を吹[illegible]
大[illegible]のあ[illegible]
[illegible]
[illegible]扇ふ[illegible]み[illegible]秋風
のゝ[illegible]ゆ[illegible]
[illegible]
みた[illegible]
う[illegible]枝[illegible]

三日月や[illegible]かゝる竹の露
名月の出るや[illegible]
蝶も来て酢を吸ふ菊の鱠哉
ゆく秋や手をひろげたる栗のいが
ま[illegible]
初しぐれ猿も小蓑をほしげなり
こがらしや竹にかくれて静まりぬ
塩鯛の歯ぐきも寒し魚の店
[illegible]の[illegible]や[illegible]の雨

梅[illegible]　丈草
背戸くちの入江にのぼる[illegible]
[illegible]庭をはなれて[illegible]の小鶴かな
[illegible]汐の音[illegible]
淋しさや[illegible]

一 蕉風無格といふ事をいひそめられしおもむきよろしく
もおのが宗旨になりをらず侍るとこゝへ書しく
崩[illegible]崩[illegible]
さいはれなきは一巻中みな格を崩したる手

柄やうにて有べきやうに答へて曰たゝ
き格を捨去嫌ひをこうまうそなわを手柄とする法に
俳諧天の法格なれば有べし無格なる天格を
得るのみならひきなる有べし今の世格なれば
て天格をうしなふゆゑに無格なる名附ぬなを
有をゆゑなる竹を直くせんなを強くそなを
うる有べして放てを直くなれば如しその直
きを天格也天格なれを最上なるを申有べし附
句のうへ月を月の坐花を花の坐なあれば

きまりあきなれば変べし好みくそ格を
くるあるべきなれを天なるべ有べし
春季に三句なくいまを盡なる勢ひあれを
立句を法に付る恋なるもわれにたまひ方
なる有べし四時のうちをうそれ勢ひ年々お
ものき事なるその時節なるこうを順也
猿蓑の序なる不変の変をもべしむなるを
なるべ有べきなるみ形るなるいをこの天
格なる順なるいるなるいうべ格を定れる事の

出來侍らんこと

一太來抄芭蕉談を俳諧のうへに益ある書なるやうにと事に答へて曰兩部とも太來宗匠の日記に見え侍る太來抄書を以て人に教へむとて書たまひしものを見るに益なきやを申しこれを真とおもひ迷ひをひき出す事多しなれども太來抄芭蕉談とも後人の作なる名をかりもたるなるべしと

一蕉翁を此道の祖師也その教示に定るべきうへ曰甚よろしく蕉翁その人々に作きかせ給へるに教示の定まれるゆえに教示の定まれる太來抄句毎に念を入れおもひあるべきをもとめ凡兆に俳諧もはなはだうまかりしかども也さひ志をもつてかの一句一句に作りかへ一定なる詞なりその要なんとする所に無格本躰なれば

一いうふるき歌風雅の誠をたゞちにいふべし
答へ曰了芥先生備州退身の後此歌ふ
此巻をよむに野の山もかはらず
なりてこゝに我〳〵往昔の老耄を
歎うたを事に如ゆゑふ兩國橋上ふく
たゞ〳〵驚のこゑをきゝしにそれ
一ひとのあるとうや
一丈草法師の曰我門所の俳諧ハ詞の俳諧ふ
あらんこゝろ俳諧をもいそれ

正秀こゝろねてその意をやそなたてし
山をたゞ青山雲をたゞ白雲やと答へられ
なをいふふといふ答へ曰
人をたゞ女人をたゞ男
一この巻の集ふ第一義をよりいふべしふ今を
俗禪多くきれやすゝをいかの事なるや
やいふふ答て曰達摩中國ふ入〳〵不立文字
直指人心見性成佛やいふのみ故ふ禪家も
禪とうゝなる也六祖こゝろを一時の権法〳〵

持詰頭公案をもちゐる権法ゆゑ事
をたゞしくなる話頭ゆゑ法めるゆゑ見
性ゆゑなる事をうしなをたゞそのまゝ
くのはゞのみさをゝいくきぬ是を
俗禅とも申なをを

一隔心の俳諧ゆゑいんゆゑる事を問
人ゆ答ゝ曰ゝ芭蕉談ゆ去来ゆ事を叮寧
ゆをゝへらゝゝゝ花を貴人あるを上客
珎客なるゆゑゆゑる心得なゆ他門ゆる捨有

蕉門ゆを捨なゝ隔心ゆるを他門ゆゝ交る時
不禮なる紀心得をいなるゝ蕉門の交を
をるをなをゆを同心なを翁い花定坐なゝ
ゆのゆゝ十七句めゆ出るゆゝをゝまゝ
ゆゝ實の俳諧のうへゆゝい定坐をあゝゆゆ
なるゝ我等を他門ゆゝ窮屈ゆ交る心なをれい
他門ゆゝ交ゆ隔心を習ふこゝろなゝ

一今の世点取左右合せ多ゝ蕉門ゆもゝれを
をゝゆ事なるゆゝい多る人ゆ答ゝ曰蕉翁

点取なり。考へ捨てし也。今の俳師は
なほ世に出て世人をたぶらかすむ法なり。
なほ点を取たるやも害なり。考へれも
蕉門の句を減意ゆゑ他門の句を増意
也其減意をうしなはぬやうふ句数もなく
なくぬきて誠蕉門の減意をあるべし。増
意ふまき様さふやうふなることを道なり
左右合せて和歌のうらふふもある事ゆえ
蕉翁も此たをあるを減意増意を以

てわかつてれ也考へれも蕉門ゆおいて好む
こふはふふなり。曰減意増意のもつ成
聞ん巻

廣き野をたゞひとのみや終ふ夢

文草法師曰廣き野やをいやゝ聞ゆ

苔の野成ゆゑひとゝなみやきゝ夢

やををされたを調詞の和平なるを如し

ふこゝふふ二ふ月の吹ふ

ふてふしの地ゆも苔ぬけ

良句なり。

蕉翁曰先ゝを地まてたゝきまてたゝ
いやしくゝゝもやうゝ也是まる調
詞の和平をいふ備二日の月やたかくゝ
しき詞をまつゝけてゝまた吹たる歟
やいかるを作たれ後の句をたゝれの
あたりのたゝゝゝゝふ地ゝも落ける自然のさま
をほめられ侍る是ふ判の詞をたゝめれ
左右合せたれ廣き野をゝの野蕉風
の減意明らかふ和てをは是をうたねゝ

ふをたを点取も蕉翁丈草法師の句評も
れ〳〵ふたれ
書ふもたゝれたゝたゝ
やいふたふ緒
書ふたゝれ卵をたゝる
やゝ蕉翁のたゝたゝなまひをたゝ見る
意のうゝふもうゝ心をたゝひ詞も和平ふ情と
まやうふれ也萬事ふれひたくゝゝみ
ゝ蕉風のいやしくゝゝふ慎むれ

附

慶應元年冬十月

自跋

[illegible]

蕉風談拾遺

蘇室久安述

一一串居士の焚餘雜記巻の二に曰俳諧は排諧にして詩に出たれども詩の贈答は古へよりの事なれども唐の元白（元稹白居易のことなり）にいたりて殊更盛んなり。一首の詩を作りて贈答するは唐人たりとも雖も一時の應酬にして及ひたる韓愈にいたりて初て聯句といふ事をなす始め

たゞ是は明友両三人も寄合て十六句二十
句なとの排律の詩を作るなとそれの詩ハ韓文
にあれたるにて畧れその一坐の勝會には右様
の事もあるに澤山にあれ共何れもその人の詩文世
に珎重せらるゝほどの人にてもなくよしひそ
あまた大先達たりとも雖とも他の出逢面白か
らける人なれと碔砆（玉と石との交りなるをいふなり）の混雜に
て一時の勝會なれとちらかへされ共も壽梓し
て後世にのこるに至るまし　故に諸家の詩集

にも多くのせたる事もなし予か見る所にしかく明
の高季廸の集中にのせし數首なとの如きハ
格別のものにして面白しその他唐白虎祝
枝山との牛石の聯句も格別のものなりまた
東坡佛印との聯句もあり　蕉翁曰黄奇蕪新に
あらされハいふへからす
そさハ黄ハ山谷蕪ハ東坡なりその奇新をまなふへしといふ
こゝろなるへし蕉翁の俳諧ハたゝ俚言に戯むるゝものゝ為
ところのものハ東坡仏印の場よりはしけるに後の俳
子俚言のうへにたはむるゝ所も俗にもちいられハ更に見る
所なし　蕉翁の高調ハたゝこゝろにありて文字のうへに
あらされハ第二義なるをえられハ俚言のうちにもはなはた
高調を生するもこれ也またこよむ人のうちにもしれ人のか
るをしくこゝろの俗なるをたゝむるそ　錦のうへにも

著て口聖人の語を吐てこゝろ私欲のみなりし芝居役者のやうなるにめて俳諧にも一種これをきたる流弊ありといたく清られし蕉風の俳諧なとさへあるなれ　総て知己のものよりも合て排律よりも律詩絶句に至れまての詩を作る事を聯句とは言へとも律詩絶句のこく其所南澗聯句石林聯句虎邱聯句なとゝ題にあるなり　の聯句と云題は書きしき事と見えたるをはなれを聯句と云ものは排律體のうつし見えたり聯排といふ名さる古く入唐の輩も皆その佳會を見覚えたる事と見えて古は　朝廷にも試みにも聯句なとの事も有

し趣なり　朝野群載にも挙源氏物語にも見えたるはまゝに覚えてなきさあれとも文字の道を中古の時に皆湮没しこゝの道はこそはれて文献をしるしゆゑなるにたりん　賢者達の有て文章をよて後の世にはくる事のなかりしをいふ　後世に至つて天龍寺の策彦長老聯句の事を始て傳へられたるを　是より以前の聯句は皆一坐の游會と見えたりこゝに至りて始めて格式をはしめられたるものと見えたり　屢々省中省中を禁中也にいんきれて御會のありしより鳳城聯句など称せるもの世に傳はれる此聯句の式は彼古人

の聯句なる事こうそうあるひは百韻聯句は五言ふ
くさうくさう五字城と名付隔句ふ韻脚をふむゆゑよ
十八韻なれは三十六句となる百韻といふは二百句の事也
あるひは百五十韻難韻なれは五十韻もあり唐人
韻字を用ふる故ふ百韻五十韻と申なりまた蕉翁
素堂漢和の歌仙は漢字詩の如くなる故三十六韻や
いふ〳〵可也今の百韻五十韻はみれ和字なれは韻は
なるゆゑなれなる百句五十句といふなり
惣〳〵初二三四五六七八句を表や〳〵〳〵此
句中はこの時節の句を付なを結尾の両句を
會集の趣きふ〳〵その中間の句ふを四季を論
せは對なるなり云〳〵太嫌のあれよ〳〵人物

氣形地理物名は八句太やう且その對句やは
なるもは古人の對偶やなを事こうそうなる字の
格を以〳〵對なるは本意なるよ〳〵世ふ行る
三重韻やいふもふも此對偶の為なる策彦の
定を置付〳〵由なを今日に到るも五山流
ふを此聯句式いまふ行なるれなを付〳〵此聯
句鳳城ふ〳〵流行なるの打柄ふ松永貞徳も其
意ふ志なるひ〳〵和字ふ〳〵聯句を定められ
やう見えなを時ふよれを漢和なる〳〵聯句の中

ふ和句のやうまゝえたるもあり和句のうち
に漢句はまゝたるもあり漢和混用の出
来るかゝハ韻字を脚やうする事分明なり今の
連歌ハ韻脚の有無ハさゝれやうもその取
捨定格の模様ハ聯句同様の事ゆゑ尤聯句
よりも出たる事やうに見えてうさわれハ連歌俳
諧やういとゝ聯歌排諧やうに称ずるもきう負徳
以来の連歌ハ聯詞なるゆゑ故ふ聯歌排諧ふめ
らされハ叶ふまゝ蕉翁のハ俚言ふ戯むゝ世俗の
うへなる雅心なれハ俳諧
連歌やうなるゝ俳優の諧合ふなるふ

蕉翁ハ俳優の諧合の上ふ詞をもちる通詞なり故ふ
詞ハ畢竟無茶苦茶こゝろのおゝ所隠逸道心ばゝみ
排律の體を學ひ得たる諧合なれハなるゆゑ禁中
ふハ御樂始ゑ御會始めやうゝ和歌の御會始
催ばるゝふやうなるゝ營中ふてゝ一等をくゝ
て御能始め連歌始めやゝ遊ばるゝよゝ豈俳
優の諧合を以ゝ御祝儀の始め事やうなるけ
むや蕉翁の俳諧俳優の諧合なれハ仕官と名利を
豈のゝゝむ事をなるゝんやなゝ隠逸道心癖子
の樂ゝゝを樂ゝむゝを
本意やうなるゝ能も猿樂なれを狂言もあゝ
やうゝ三番叟翁なるゝ決ゝゝ狂言あゝなるゝ

神樂の一等時分きたるものなれいあるをもいふべき此聯句聯歌の式を尤定格ふくべきなるべし〳〵決〳〵面白き風韻の出来るものなるあり世間にて聯句を流行せる事なり（蕉翁の無格の妙あるを不知後世俳諧の定格を立るおくれ所作まことに言語ふたたびなる愚なり）五山流の人なりし古へよりの古格ゆゑやむ事能得ざるもちひきたる事なりもその外誰もこれを學ぶ人いなかりしを和句ふ〳〵これを見て同様にす

事ふ〳〵雅情の真面目いひ出せる事なり〳〵定格なれいあるべし故ふ蕉翁一筒の識見を出し〳〵法格を一洗脱去〳〵（他の學者既ふ〳〵蕉翁の無格をいふ其道の人何そこれをさ〳〵ばかりや）別有天（桃花流水杳然去別有天地非人間〳〵李白の句より一種格別の心培〳〵）一線の妙培（自得の附肌也）を以〳〵聯句の神通（縱横自在無格の躰なり）を得たる事明白見證ふべし（蕉門ふ心なき他の學者理の上ふ〳〵無格を見〳〵見證なく〳〵教ふ蕉門の人い〳〵見證せざるべからざるなり）ふ漢和混用の事策彦の時ふを大ふ流行の事ゆ見え〳〵洪覺範（宋朝の高僧にて文字

のちまであまりあるものにて妙楷の所ゆいてうつ
たさまでや金山の傳燈を得る事あるまでなりけり
文字をたゝあまた石門文字の一ゐ瀟湘の八景を詩て
禪數十巻をあつまりさせり
作ありて有聲の画に宋迪ゐ無聲の詩を所望
せられし事をまねびて近江の湖水ゐこの八景
をうつしたるあり近江八景とゝ名付て策彦
ゐ詩を作りたれたる和歌もありまたを
主上の御製とゝ漢和八景の御屏風とゝ御所ゐ
あるとゝ今もその學びゝ見えて五山泉の寺
院ゐゝ古屏風ゐ漢和八景とゝ八枚屏風の小

たるもたゐ下に画をうつしたる上の色紙ゐこの
策彦の詩とゝひゐ和歌ゝ二枚を張漢の屏
風ゐゝ色紙二枚ゐ洪覺範の律詩四句ゝ書
く張たる様見たる事あり此等も漢和一體の
おもひたきたるを聯句盛むゝ折柄和も又
聯歌を仰せたるゝあるひゝ漢和混用の御
時もあるとゝ事おもひたるを

蘇室うつれる

太来抄

あゝ山猿の法ゝ栗ゝ 小五郎

茶敦く二日おゝ行ぬ野ゝ

正秀曰あゝ山ゝ少年の句ゆゝゝゝ風

情あゝ花散くゝ悪功の入たる所見えゝ少年

の句ゝゝいひゝゆゝ 杏東曰二日おゝ行ぬゝん

ゝゝあゝゝ他流の句ゆゝゝ蕉門のゝゝゝ嫌ふ

所ゝゝゝゝ

今蕉門の人二日おゝれぬをのゝゝゝ句

のゝゝゝはゝる人多く見ゆ

一一草庵の席上餐應を感ず

ゝゝゝの淋しき味をゝるゝゝ芭蕉

ゝゝの能ふ住ゝゝく秋ゝゝゝゝゝゝゝ夕

ゝゝ友ゝゝの方へ行ゝゝゝ

みのむゝゝゝゝゝ

ゝれゝ深く味ひゝゝゝれ蕉門の後ゆゝゝ

ゝゝゝゝゝ

一芭蕉談美濃の落梧ゝ瓜畠集を出ゝ侍ゝむ

ゝ師のゝ句ゆゝ歌仙一巻をはゝめふ載侍ん

やいひ翁の曰我も集作らんと巻をなし
たる事なしむかしの撰集あるをみて歌をよみ
し人あり我俳諧をそれに異なり云云いつれも
故そややいと人に答へ曰千載集の撰出来なり
やと西行の見たるもやらたをしに途中人に
逢へ
こゝろなき身にもあはれは知られけり
しぎたつ沢の秋の夕暮 西行
此うた入集あるやと問とそれをなしやと答へ

待るそれかゝの撰集見るに初よりをしなべて
きこゆるをされたるもまたまつあるなれ
ども西行蕉翁をしへ西行の場に
あるを撰集を見るもなを西行なるも
うちあるむかのこゝろをよく味
ひたまへ

一同書
格を中昔の格やいと異なれ問ひ人に
答へ曰

後撰和歌集秋のうたの中ふ

あきのころちひあれ所ふ女ものあ
また篇のうちふ侍りけるものうち
のくもゐをいひ侍りけれいきりう
ちよう（下の句上の句ふ未ち）

讀人しらず

きりぎりすのなくあまりの秋ふあれそ
それのいろ〳〵あるべし〳〵ちなれ
うれ〳〵連歌なりまる

古今和歌六帖第四戀の部ふ

紀友則

たきぎせふうれそのねをとめ法ちも
人のきてるをいとゝきれまち秋
あはうほのきれたの恋いうれたふる
右ふ杉形〳〵ゆちる事あ八句有

あのそうれたきぎる

そのうちに月れひうちふ〳〵むれふる
右あ〳〵杉ちゆちる事九句有

[illegible]

紀貫之

[illegible]

[illegible]

[illegible]

金葉集第十雜連歌之部

[illegible]

[illegible]

[illegible] 永成法師

[illegible] 律師慶範

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蕉翁格に中昔やいひたまふを我俳諧を無格

[illegible]

[illegible]

侍る連歌をなきあり

附録

蕉風附肌の根源を心地以て心を傳ふ花みさ
ほを理や物や一切ふたつのそなたその枝葉を
いとを深きもあり浅きもあり遠き
もあり近きもあり広うして
あらうれをしうぬもあり強きも
弱きもあり枯のたうたれ
天然一種の法格ふ定まる法格
もあらぬなれば古人その枝葉を強く

名附く匂ひうたる位ひ地枯とうみちを
いとれたる所をその枝葉ふや〻ふ
たるふ根源ふたるふ入るのたれを歎き
たまふの名目を捨てた前句の情を知て無
意ふ句を發感合をたるふ蕉
翁の教へたまるを則根源天然の法則自
然ふ心印ふ〻むるみちひきたる
その前句ふ情をたるふ道あり眼ふ發ふ
る句や耳ふ發る句や鼻ふ發る句

や味ひよき發句や情より發る句や
心より發る句や有のみ此六つのもとより
さまざまの事をいひたるまでにて
更ふ他の文學なし唯此一身のうをゝく
万事萬應なるべしその根源は心よりなみ
なる時は鼻よくこうく耳よくきく眼よく明
らかに舌よく味ふ情よく通るなれば
されをこゝろのよく静なるをこれをなす
のみにて一巻のうへに変化をめぐらしきも

のやうふいなるもまゝひのはたらきなるを
一商賣往来町盡一國盡一みな変化あ
るべしはゆゝしきなれ文字のうへに変化を思ふ
ゆゑに氣ふやゝ拘こゝろのをもなる事
なしなやへを一日のうへ朝より暮ふいたる迫
唯眼耳鼻味情心のをもきあくはもを
さらに変化しあるものは其うをもなみれ
無意よりは發る蕉翁の附肌やおなじ事
なるをもやくはやるべしゆゑに此心外物

行根ノ働ニ因テ
人生ノ変化ヲ来ス

にこれぬやうに静養有べし　けるに今また
いたづらにその枝葉のふかきあさき遠き近
きうすきあつきかろきおもきつよき弱き
にかゝはりてつよきはかなき位面影甚しきは一句
のうへに躰を用とせざるもありなどこそすれ
事にうちまよひて根源の所にはいりこまず
されば是を何をもて蕉風の俳諧なりといへ
るんや蕉風は附肌の要なり天然の法則
自然の心印をそれなるのみなりとく文字

は畢竟第二義に落るものなり　其天然の
法則自然の心印をはなれて是を第一義とし
蕉風附肌は頭脳なりといふべし　丈草法師と
ともさりし言語の俳諧にあらずところの
俳諧也ときこえけるなりとさればこそ
蕉門の俳諧をはなれて一字一句の小道にあ
らされこれをよくはなれて自性の本躰を明
らめて欄柄手にある安樂境の樂しみを
なさんとするもあるべし　自得自得

蕉翁自有蕉翁之心事蕉翁豈有蕉風之
可傳哉
慶應元年初冬

東塢亭藏梓